青山御流 活華手引種 一篇

ヲ多9
1412
1

門 ヲ 函
號 1412
卷 1-4

青山御家御流

活華手引草

執行藏書

敘

莊周曰受命於松柏獨也正在冬夏青〻世言也可取以贊我挿花矣余遠祖黃門帝覺君深拯挿花之妙創青山樣至今五百有餘歲及門〻徒日加月倍本支蕃懋惟

松下水流處藏書

以我青山〻流獨得其正也其說
曰挿花無他術要在挿挿〻意〻
則變化〻〻則神韻自生或意齊
或諫故不敢拘一體然後見精
妙夫以手擒手意為術〻〻正也以
不拘一形為法〻〻正也苟知此

正訣則撓紅投紫優作向背神韻
活動以全其天謂之活花而可以比
松柏冬夏青〻矣苟不知〻則戕
賊枝葉束縛支離枯槁立至類害
其天謂之殺花而殆如樓首無不
潰亂矣殺活〻〻寓持在其得正似

松柏與否耳若夫不知訣不由法
而乱插浸投則雖不戕賊豈復得
全其天哉是亦穀花之〻罪也
故余門謂插花曰活兼余嘗閲穀
花之徒余會頭壽米園老人作活
兼亭門種續篇以誘後進老人以

尊心得自之餘祖述希覺君之
説可謂得其正訣矣今而後〻進
得知活兼之〻正法實賴此編豈
惟免於穀花耶余知此編之
永行於世也與松柏冬夏青〻亦
當同焉

天保十有一年歳在庚子春
三月

権中納言藤原基茂

活花手引種後編序

昔者武田機山書其弥云、其捷如風或詰之曰、風雖捷疾、如忽起忽止何、曰、止則以牙兵繼之、或恪曰、要第二合之勝也、此講武之言、亦有似此編焉、寛政中、桂月園主人、嘗以我青血之挿花、唱於江都、遂率亜相園藤公之旨、著活花手引種、其術大行、

爾後典繼者、猶屑之忽起忽止之、
黄門希賢公夙遵庭訓、深極插花之妙、而憾
無手引種之續篇、且憫插花者徒專趨浮豔、
不由正途、　命有雅著續篇、附以四方
親炙弟子所、捕花樣、彩質備具者、數十百種、
以展活花準繩、而辱賜親閲、及序文、方圖刊
布、此所謂以牙兵繼之者、而時機未會、

公遽捐館、事半而寢、亦殆於忽止、及
今、相公嗣立、以
王事之暇、繼
先公之志、乃　命有雅、竣其功、於是有雅
喜而再加校訂、其中有鄙意所未盡者、恐後
進或不易曉、因竭數月鉛槧之力、以爲定本、
又請諸名家寄題、以潤色之、乃告成、嗚呼此

舉也、非有　　公之命、安得興廢成功哉、果以牙兵繼之、得第二合之勝、有雅既不顧續貂之嘲、以著此編、然至論揷志、則鄙意自有所在、蓋得此編遍及海舟夫人因此以宗我青血風猶兵家之宗武図氏、永傳無窮、則非復忽起忽止之類也、是有雅之所竊期之、

○序五

時
嘉永五年龍集玄黙困敦冬十有一月南至
日謹識於百花叢樓
弟　命蓼莪會頭壽菜園水谷有雅

男　逸雅謹書

凡例

一 此書活華手引種後編と題するこゝ過し寛政中江都桂月園泰雅翁の著されし手引種といふる書の世に行はれし其後編を次事永く絶たるを園公の命によつて此撰著なれる處なり故に巻中にゝ前集の列次に倣ひ其遺漏を補ふ但挿法を論ずるにいたりてゝ〻ま〻芳意を述らるゝあるに近世挿花者流の浮艶にうつして法則のゝだりなるを正径に導んとゝ也是先生竊に道に志を盡すゝ故也

一 巻中事理論評等の如きこれを悉に擧んに文續渾淆せんこゝをいふゝ故に暫く何々の書に記せるのゝせり又伎術乃はゝ〻等は活花早教諭やいふる書に委しく辨ぜられをゝどそを扶翼〻〻其義全めるゝ〻し

一 瓶花の圖々高堂會筵の折ふれ時に當つて縮寫しなるなれば挿たる年月の遲速あり〻ふゝ〻其順次を正さゝ〻また席筵の槩畧〻〻唯一二を記せのゝ

一 挿花者の號は各瓶の傍に記せまた扇書に御會頭抔記なるは其國の活花乃司を命ぜられたるなり但園号なるは職勢也亭号なるはゝ〻御皆傳の徒に〻或は御會頭に准ぜられるゝ有又また軒号なるは御中傳の御許を蒙て徒に〻齋号なるはゝ〻御傳を受ざる御直門の徒也

一 巻中御家御直弟の外は會頭の門社たりやゝ是を擧げ、
ゝゝ花號の旁ふ通稱を記ゝるのは後世其人を知るふたよりよきを思へゝなり

一 巻中揮者の貴賤演習の新舊を論ぜず唯成圖の位置ふよつゝ列次をなせり又和歌詩文發句の類は何れも圖ゝよるゝゝ吟詠をも得ゝれば貴賤の次第を混ぜ實ふ止ゝゝを得ざるがゆゑなり

一 御當流の活花は巻中ふいへるごゝく正風体と雅整体ゝゝ嚴格有ゝ前編は正風体の花圖のみなるを此編は正風雅整の兩体を交へ圖ゝれば雅學の徒風体を異なりゝゝゝゝ

ゝは兩編を照合ゝゝ規則古今ふ徹ゝるを知るべし

一 前集は圍中狹く画圖麁魯ふゝ活意を盡さゞるふ似たれど今此編の画圖はゝゝふ精細ふゝく其勢形を筆端ふ顯ゝゝゝ所謂寫生家の妙ふ出づ但着色をほどこゝるのは元より活花ハ目をたゞさゝあ心を樂ゝまゝむるの伎なれば其形容ふ美麗なゝんがためなり又ゝゝ景圍を廣くゝ猶摺疊の大幅圖を加ふるハ花圖の整齊を細微ふゝめさんがためなり

一 此書ゝゝ全部の稿本五巻なゝゝゝ花圖追集ゝゝく巻々紙量を越ゝ猶遠境なるは集撮いまゝ全ゝゝ依ゝく巻を後編續後編と分ゝ十巻ゝゝ既ふその集る所のゝゝを後編五巻

〻〻今梓に刊せ故に草木養の遺傳據説問答の追考
および前編の訂正等は此編の巻尾に記すべきと其餘地を
得ざれば續後編の巻尾に擧ぬ

一
江都浪速の御會頭撰所の花圖また諸國の御直弟の花
圖等は續後編に擧次ぐ發兌に及ぶべし看者載書の先後に
よりて會頭社門の甲乙を論議するこなかれ

一
巻中往々盆山の圖を擧たるは當　御家の先君亞相基香卿の
深く是を愛賞したまひ三日月の巻にいたる御傳書に是を
著したまひたれば今まで此伎に志ありの人少からざりと
盆山々堂室添飾の一端に〻活華〻粧觀を一にしたれば所

謂座〻深山曠野を分け不歩〻〻山海溪泉に望むの懷む
をもたるに至らん故に活華の位置に附〻〻爰に收む看者能
これを察せよ

右十有一條受

壽栄園先生旨謹識於錦章堂芒花窓前時嘉永六年
八月望

春月亭柴田濯柳
美松亭佐竹勁節
蒼髯亭岩田雙樹

受業

活華手引種後編目錄

巻之一

一 活花正意之事
一 古今花則沿革之事
一 書院茶室會席之花差別之事
一 花体花器相應之事
一 花伎習塾次第之事
一 雅整体九枝配當之圖
一 九體之圖 并真行草之事

巻之二

一 懸瓶花体本源之事
一 懸瓶行草六体之事 并變化六体之圖
一 懸瓶之釘之事
一 花賦起原 并時世沿革之事 附 投入名義之事
一 留方數条之圖解 并花配用様 滋器心得等之事
一 平鉢水盤等之瓶中留方之圖解
一 二木三草五葉之辨 并 准種之事
一 一葉本性陰葉陽葉之事 并 組方之傳 准種五草之圖
一 萬年青性容之事 并 葉組之傳

巻之三

一 君公會頭御直角活花競糾圖繪
諸家和歌詩文載之
巻之四
一 同社活華競糾圖繪以諸家題詠潤色之
皇國活華赫隆考
巻之五
一 同 活華競糾圖繪諸家寄題并錄
草木正字異名等之事
通計 十有九條
活華手引種後編 目次畢

○活華手引種 續後編 五巻 追刻

右一之巻ハ東都御會頭霞谷園一雅准御會頭養霞亭琴松亭等の撰む所の瓶花圖ゆゑ二之巻ハ浪花御會頭翠霞園蘆節准御會頭山鵬亭松養亭等の撰む同ゆゑ競糾圖繪なり三之巻ハ諸國御會頭并准御會頭等の撰所の圖繪ゆゑ瓶花圖百餘瓶也最御家御直門の徒のみを擧ゆ諸國の名家高聞の士の和歌詩文を以ゆ是を潤色ス又四五之巻ハ書院床飾の圖式床起原の考證ゆ起ル草木養撓之事并草木四候名寄品位高卑の事ハ

木草分ちがたき品類の解 據說問答の追考 おなじく華花の字義之事 竹器根元之論辨等を委〻〻舉〻 因ふ 御當流相傳の書目 一月昇達傳の義を〻附〻め爰ふおい〻 前編の遺意本末全き所〻〻〻實ふ活華大成の全書〻〻〻〻〻續〻〻發兌ふおよぶべし

明治四十年七月一日 執行弘道氏寄贈

活華手引種後編卷之一

壽栄園水谷有雅著
男　錦章亭逸雅校

活花正意之事

○皇大御國ふ活花の行〻こと久〻〻〻流汎繁茂をなし其據る所亦昭々〻〻〻各嚴格を建〻〻。普く瓶花の書とゝふ仙傳書（寛永廿年癸未開板）拋入花傳書拋入花薄拋入明和の間の刊本也等古く刻〻〻書〻〻是ら足利慈照院殿の古則と言し、其体東山相阿弥千家真古流等ふ建る所其温奥へ佛家の小乗大乗ふ基とせり、池の坊家傳の書〻〻是〻〻〻源氏流〻〻〻此慈照院殿の頃ふ起り〻紫式部ふ五十四帖と大綱〻〻〻事、源氏活花記生花校折抄等の書ふ見えたり又松月堂古流へ悉曇ふ〻〻〻〻〻〻〻〻〻容教ふ〻〻〻事、生花四季百瓶圖挿花故實集等其餘此流儀の數書ふ見ゆ又宏道流へ明表中郎が瓶史を準繩〻〻〻事、瓶史國字解ふあきらけ〻又石州流へ元茶道〻〻出〻花体を三代集の詠格ふ

似る事、よりあつまりやち草等を見えなり又近世末生流といふは西洋の窮理學を則とし規矩を起せる事、挿花百錬花術三才斷等にまたまた遠州流は風格數流を分ち分土をもつて花矩匡なる事、挿花衣の香四季詠松の翠等の外數書のみを知らざれば今東都に行なはれる所の正風遠州新遠州等の數流をとるに唯花形の功妙と旨とし手錬心と盡すこと伎とするむの風儀にて、至まりとしつべきものなれども度と越えざるべきの域に下るもとむべし此他の數流或は醫學を基き或は唯一西部の神道をもつて建るなく繁雜にして悉く枚挙するに暇なし知る所今まほぼ一百餘流に及び其書また限りなくして一二を擧ぐ

他の本據と顯るものは唯幼學の徒に此道の既略を知せんなるもの　爰にいまいへば盛なるに今

支流衰たる有又近世起るもの當にさんなるの類いらく多る中に古を

ちの傳統正しく今尚隆んなるもの　皇大御國の古義に叶ひ神

靈の現に護まもらんと思ふたるに奇く備はる我　青山の御家なる

有る。然るに我　園の御家に此道のいと尊き御傳有る尚中祖の君のいとこまかしくれば、

後の花園の天皇の叡慮とかしこけれども今の活花の正綱と起し風雅の道の万

世にかぐはしき本をいとこまかに給ひたれば今や我國學の道いやひろまりけり御國の光

を照まして天直日にほひ正しきに得へ此御流のなほき證跡とはなれ

出つるに活花に小伎にして御國の一勝事にて思ひとりたれば是等は御家をまもる真心なり

徒に解べきにあらず妄に委しくいとこまかに活花の起原の事抔と諸書に數々引出なるが、

何とて自流を尊長せんとするのあまり強附會の說の多かるこは又別に活花

諸說辨といふる書を著して委しく論辨置たれば是を閲て氷解爲べし

他の流派も悉く正據整齊あるに今四境に繁茂をなしつる

實に花門の盛時といふべし。因に云ふべきの學びもまたかの道のみを

を得べきに廣く諸典にもとづく其僻を退け要を採り本學の扶翼をなすに社博識に成

べきを活花の道に又ならぶ尤正流に基く校流參差と考得べし唯流派の隆碎

を取捨するに其學ぶ爰に活花の伎は唯出生を糺し餘情に体に入る事にの

者の器量に有のみ

ひたすら向に思ひ定まる流派に多かり此出生といふは此道の最要に心得

べき事にて、それに目前の出生と真の出生の差別有なり則目前の出生

といふは諸人專ら知る所の出生にて所謂無子花は三葉より七葉迄

生じ水仙の本性は四葉なれば或は三葉五葉も有る如き抔いふは雅き

論なり。然るに是を失ふこと有べし又真の出生といふは草木の天然

稟得たる真情を含み是を花体に整齊をつくるゆゑ目前の出生
ゆゑ真の出生と顯幽の反對なり こゝ口傳にぞれ 今江湖目前の出生を
のみ競論し此真の出生を解悟せる人いまれなり 真の出生を悟得さ
せんとすべし草木天然の位置を花体に整ふ事はこれ活華の
正意と云ふ 先夢一に草木の真情を悟り位を正しく備へ真行草の分
体を以て目前の性容を顯し美麗を旨とし雅情を含藏
せるの形態を整ふ事最なり 得がたきうきなれど此深義をき
わめてこそ活華の妙處に至れりといひつべし 一瓶の花の容の
其挿たる人の性氣見ゆるものなれば聊もきたなき心をなさじ
伎のやゝく迫い巧妙を盡しく挿べき事にあらず天然を護るゆゑに

わのずから山野に生成し風雨の爲に亂靡したる目前の形容のまを
をかしやゝ思ひ挿入るゝ真率なるこゝかへはゝ天稟の美質を失
ふものなり 是真の出生を知るとゝ云ふべし然るに又其山野に
生育したるゆゑ天巧自然の風致を備へ草木本性をみごとにして
真の出生の域に至るあり其姿態殊さら絶妙なりされど其真の
出生を見出んこゝは其眼の士にしてはじめて故によくこれを研究
し其精巧を盡んこゝ我活華の正意なり 皇國清淳の風儀に
かなへるものなり 唐山の瓶花は山野に生育したる形態を其儘瓶裏にうつし日
風俗に仙人をいつるの杯あるさま瓶花の絶妙に至りては永く保んことのみを旨とする
氣質をそなへたりき 所なり又 御國の風俗はこれ柔弱なる類にして君父のため道の
ためあれば身命をも聊うべきこゝ功績をもげし國がゝなれば活華の小伎にしてもの

氣げ〜なくハ有べからん往古ハさらにいはゞ今く規則備ア〜くハ尊客招請の節
なほ最巧妙を盡〜くこそ饗應〜なるべきなれ人習儀なく〜貴人の候たゞきき
理〜なるべし然ハけれど花を養ひ保ちるハ專要の術なれバたゞへつほゞ手錬を
盡し挿入るゆゑ性容と養をいやまつ〜くれぐ〜はけるものぞ〜

古今花則沿革之事

〇活花の世ゆ行るゝや上古花を翫〜ハ是を頭上ゆ挿〜或ハ瓶ゆさ〜
く客を設〜事ゆ往々諸典ゆ見ゆめるゆゑ殊ゆ〜に法則やていはゞ
ア〜ゞ中昔以來ハ花体ゆ規矩を備へ饗禮の一格ゆなせるさまなりな
に尚今のごゆ〜きの委〜きゆ至らぬ〜其後年重なるゆ隨ひ風体
巧をなし事實細微ゆ備ア〜く漸文化の比より殆勞〜き迫ゆ
術を盡す事ゆいたれるなるべし然るゆ近世また風儀ハいゆ〜への正〜
く清潔なる質を專り故實性理ハ普く諸典を貫潤〜〜ゆ〜

細究の極ゆいたるべし是や此道のさ〜ぶ〜くの事業の成就
なる樣かくなん有る然るゆ活花を修錬するゆ先此理をよく辨へ
得く其功績をそげむべくなん

御當流活花の規則正風雅整九体の傳并掛瓶の花矩等次条ゆ委〜く出ス

書院茶室會席之花差別之事

〇書院の花と茶室の花や會席の花とゆ何ゆて差別ける事なり
まづ書院ゆ〜座鋪ハ客舍ゆ〜〜ゞ〜禮義を正〜〜〜〜應接ゆて
るの所ゆ〜茶室ハ隱逸靜座の設ゆ〜〜翫樂を旨ゆ〜るの席なり
故ゆ書院の花ハ必貴人招請の爲ゆ設け或ハ尊者の翫供ゆ備ふる處
なれバ最風格正〜き体ゆ限るべきなり常ゆ手錬するゆて大床の花の心
得ゆく習熟せざれハ當ゆ其席ゆ進なるゝ心億〜〜伎整ひがた〜

二間三間の大床上段之間等の床に花をよく修錬をし〻是を習熟すれば小座敷向の花抔いと〻心安く成就するものなり。但し大床にて大幅は三幅四幅五幅八幅對に至るものは是等の取合も常に心得置き事なり。扨花は輕くさらく〻安く〻手厚く入るゆへ是正調にて手厚く入るゆへ形態の調ふこと〻巧拙ふかもくに出來るものゆへ是正調にて手厚く入るゆへよく風姿の調ひたるをこそ誠の妙手なれ。他の席ゆく所望抔せず節は常に習熟したる手錬を以て隨分手早くなり安き花を挿終るべし。是時宜にまたがりの心得なり。又茶室の花は飛華落葉を觀ずる意ゆへ侘を宗とすれば元より茶を先になく〻花を次とす。故に投入れといふ名義となり。茶室の花は法則なきと差別なるを知るべし。論ずれば是を嘲る人なり。さて書院と茶室の〻〻かつ〻〻ふべきこと〻なれ併し茶室は茶室の作法あり。花も手厚きは好まず。總に二三本を挿す。唯作意の洒落を旨とするなり。かく書院と茶室との意味のこと〻なるこを考へ〻活花とさへつべき書院も茶室も會席も同樣に心得るべし。鹿魯なる事なり。書院の花に投入る事は絶〻なき事にして。茶室ゆへ投入るる事微考あり。こは二の巻に又會席の花は席上にて〻の取合を見るものなれば質朴なる体優美なる体屈曲なる体等大小種々の形態をなし〻。或は書院ゆへ入れ〻る屈曲變化の体をさし。又は茶室抔の趣にて取合もなり。是集會席の本意にして所なり。然るに會席の惣体を見て〻〻一二を遊の位置を知べきなり。右の外神前祭花佛前供養の花抔は〻心得別なるものなり。

早教諭に大旨を著し置たれば茂に略す

花体花器相應之事

○花と花器の相應は活花最要の儀なり。古代の花器と近世の花器と

各其形狀に應じ〳〵差別あるなり　今活花の會遊を見るに、十が六七迄花〳〵花器の符合せざるものなり又甚だきに至りては此花器は當流に用ひ抜いつる人なるよしいふに拙き事なり〳〵やたらよき格好の器なりとても不淨のものの或は出所平〳〵なるものの抜は用ひざる事論なれども花器を用ひざる事は有べき　凡〳〵活花は花に應じ器を撰事定例なり。

されどまた器に應じ〳〵花を挿ふべしとなり。當に其時に臨んで次条にいふる正風雅整の規則に熟せざれば花体自在を得がたきものなり。

貴人招請の節抜を別〳〵花をもてみ器をもて〳〵鹿畧なる樣心配るべし。最拜領の花器銘器の類を取扱ひに心得ありなり。又會席獨樂等の節は花器種々取合〳〵用ふると風雅の所詮にしたがへ〳〵古雅なる花器竹器の類に屈曲なる体を入れるを不取合なり。又近世東都より鑄出せる末廣に唱ふる盃形の花器等に直立に〳〵水際の高き花を入れるをいかに見苦しきものなり。但し小形の花は格別目立されば大形の花多に至りては花器の離散せざるを見ふべし

御當流に〳〵古風の花器に正風体近世の花器に雅整体と規格を分〳〵挿なるゆゑに最器花相應なるなり。また金銀宣德螺鈿白銅錫の類美麗の花器を書院〳〵會席に〳〵茶室に〳〵是等を好まず竹器陶器の類古雅なるものとなる也。但し染附金らん泥等に至つては凡雲上君公の翫備に美麗なるものなれども取合〳〵用ふべし

花器に巧みなれば擧たまへば故に花に鹿畧に挿こなしに〳〵

かゝる活花は書院の風格基なる事器品の上に據て〳〵論なきものなり。茶室の花は投入に〳〵称のごとく正格をなすべし洒落に挿入るを旨とすれば花器にまことに准ずるものなり。

書院の花器ふ茶室体の花を挿ときハ瓶花の取合げなるのとならバ、第一禮を失へるふなるべし

此茶花と説ふるの深く思量あるべき事也 因ふ云茶道ふ用ふる器の侘を好むハ貴人ハ常ふ美麗の器ふなれなすふがゆゑふ轉じて侘たる調度を用ふる趣意なり然るを平俗の常ふハ美器など見も及バざる族の好ぐ侘を弄ぶハ本意ふそむくなりされバ茶室ふても美麗の器を用ひくるしかるハ不取合ふて幽情をなきバ是等ハ時宜ふよることふて本據を以て強推がたき所なり

又花臺も花器ふ應じて差別あり。艶美の器ふハ上品なる臺侘たる器ふハ質朴なる臺または薄板等をもて取合すべし。すべて花臺のさわがしきハ宜からバ随分静なるをもてすむべきなりまた高低も大槩脊ふ高き花器ふ低き臺低き花器ふ高き臺ふて取合すべし。但し砂鉢の類を高き臺不取合なりまた砂鉢ふても小形なるハ高き臺よし是等甚繁雜ふして委敷ハ口傳ふよるけれど分別なしがたき處なり。

花器真行草の事。并取合せの事等ハくはしく早教諭ふ出しおきぬ

花伎習熟次第之事

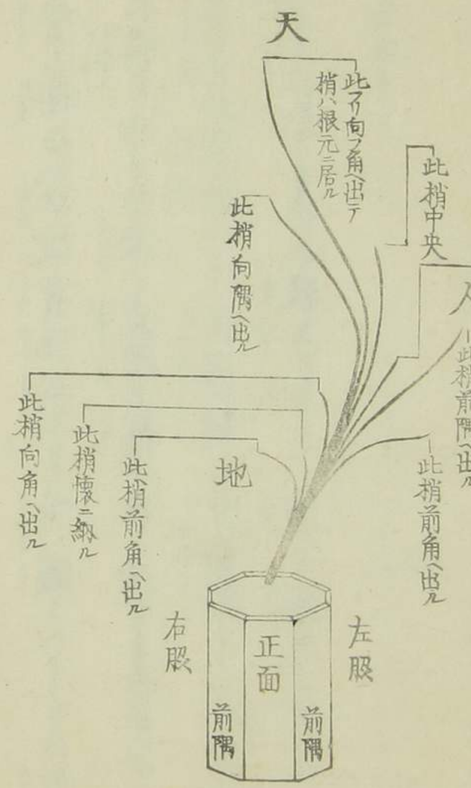
○凡花道を學ぶふハ前編ふ見えたるごとく禮義を正しくする事専一なり。其習熟の次第といふハ一ふ留方。初心のうちハ花体の佳拙ふかゝハらバ、瓶中ふ居る事の工夫を専らとすべし。二ふ撓方。是ハ花の殺活ふかゝはれバ、かたき木もの和らかき草ものたりとも自在ふ撓る手錬する事なり。是を篤と熟し得ざれバ花体の働自在ならずし、三ふ花体 是真行草の差別正風雅整の九体を會得する事なり、四ふ養 いかほど手錬して挿たりとも性氣衰へ潤色うしなふときハ活華の本意ふそむけり。養ハ平常手錬ふある事なく、別して炎暑の節抔ハ心を用ひて養ざれバ保ち難きものゆゑ 五ふ性容 是ハ梅の屈曲竹の正直なる等をいふ 四候ふ生ひ出る草木の出生をよくよく辨へ知ることなり 六ふ變格 是ハ花体の規矩をよく會得し又性容をよくしきまへたる上へ或ハ老木曲枝の類又草ものゝ出生くねまがりたるもの蔓草の類等ハ花体の正格を變化して風情を調ふ事なり。是ハよくよく習熟のうへならでハなし得がたき事なり。初心の内ふ我意を以て變格をなすバ時ハ闇夜ふ物をさぐる如き伎ふして是を異体といふなり必ず慎むべし 七ふ位 この位といふが甚會得のなりがたきものなり。俗言バ燕子花と

花菖蒲と花ちがへ八とおのゝ同じ姿のものゝ燕子花とゆるかゝ位の自らゝ見え花菖蒲ハ猛き位の備ヲ花ちやめと八そいやしき姿の自然ゝゆる性容と差別ゝいれをいなり　かゝのごとく順次を正しゝ修行をれバ清華の妙手ゝ至る事遅々なり。其序ゝ違ひゝ行ふ時ハ生涯花の奴ゝなりゝ界達の期ゝ至る事有べゝ。ゝべく花を挿ゝ惣体ゝ精心の盈るを最第一ゝ心得べし。たゝへいるほゝ巧妙をたくみゝゝ挿挾む。精心盈ぬる花々ゝ拙く見劣ヲせゝるゝ一枝一茎を挿ゝ精心ゝちわたりたる花ハ實ゝ整齊ゝゝ見ゆるものなり。ゝと修行をるゝハ初學のゝきよりヲ一花一葉ゝ心を用ひゝりとヲ瓶中の納ヲ等ゝ深く精心をとゝゝ市ゝ習へゝれのづゝ熟所ゝ至るなり。をべゝの道精心ゝ盈ざれゝ全き備へたちがゝきものゝ也。唯精心乃至るゝ至らゝるゝ方より明らかゝ見ゆるものなれば。拙を恥ゝ當ゝ精心のみち篭る所を專ら要と修をべきゝなり。將花体を習ふ間ゝ必故實性理をゝ辨へ識るべし。ゝ何ものゝ事ゝ理との備らゝるゝ全く成就の極ゝ行ゝるものぞかし。

右五ヶ條ハ活花の緊論なり。尚詳解ゝ早教諭ゝいくる書の初編ヲヲ九編ゝ至れるものゝ數条委ゝ著し置めれども聞く辨へぬべくなり。

○雅整体九枝配當之圖

花器の八方に配する事は御當流の深秘なり〳〵九体九枝傳に詳なり



前編に七枝配當の圖あり右著る所の九枝は雅整体の規則なり真行草の九体なりと雖も変化口傳あるなり

○夫御當流の活花九体といふ。前編ふみえとり骨法九体の實測をいふ也。
但此前編の圖ハ其大旨を記なり。これ是を正風体と稱へ所謂真ふ三体行ふ三体草ふ
もの也。尚本来の規則ハ別傳あり。
三体の差別を備へ則古傳の摸範ふ。此正風体ふ七枝配當の規則有て
七枝配當の圖ハ前編ふ出たり
恥九体ふ應じ。こゝろ〳〵を變化の格をなせり因て是を準
縄〳〵古來諸國執務の輩又此極ふ肺肝を碎事少からず。茲ふ
故黄門希賢君往年花則の細窮ふ御心を盡し玉ひ。此正風体の九体を研究
有て新ふ雅整体の九体といふを起し玉ひつ。こゝを又有雅ふ訂と命じ玉へり。かゝる哉
此規則備てより猶正風体の摸範とする
茂なり。こゝに〳〵ト此正風雅整の真体より外ふ出ることあるべからず。此九体と限る。深き義理有事ふ
く其性容をつゝぬき天地自然の真理ふのゝ。此正風雅整の規則と以て萬態ふ及ぶ時ハ草木悉
〳〵草木天然の姿もべく此極と出る事のいなべ即正風雅整の規則の外ふ花体整さる理なりそと
曲〳〵姿体と作るとき自然の姿ふそむく故ふ。是より後ハ當御流ふ正風体の九体と雅整
もべくの花体此規則ふ止ることを思ひ定めろ。

体の九体の両格備りて譬ば咫の鏡ふ五百箇の玉を以て糾へる如く或ハ金聲ふて始めて條理を玉振して終るが如く備ふるなり此雅整体の九体ふハ九枝の配當と六枝の補格ふて天地萬物の窮理爰ふ止る妙要ふて此條口傳ふなるべ〻ハ辨明ふ及ばざ〻

正風体の七枝雅整体の九枝ハともふ器瓶ふ應じ變化する所華葉枝の多少ふ隨ひ三枝五枝七枝ふ配て或ハ増補して數枝數莖ふ至る最合して全体となる等其活動極なきものなり故に正風体と雅整体ハ古今の對格なると則正風体ハ前編ふ數瓶の圖ふて以て爰ふ舉て顯さば最此編次々の巻中ふハ両体ともふ數瓶の圖有ともへども或ハ瓶ふ二種三種をさる体の多々なれば初學の辨明ふ難かん事を思ひ尚雅整体の尤正しき骨体とて一つ二種一瓶なると九体左ふ撰て圖を著に〻九枝配當の摸範と花器花臺の真行草ふ倶ふ其規格の全備せるふ法を

を〻〻〻く尚草木の性九体の規格ふ熟叶へるものを舉ぬ但此九体とて〻草木の性曲直疎密ふ応じて何も其一種ふて九体を整ふ事尤自在也

また如何なる難枝難花なりやと此九体と以て量るべき妙格をやふ齊ひ安し是等の委しき極ハ口傳ふなるべ〻ハ

今瓶花者流ふ於て〻秘事又ハ口傳と唱ふる事差別なり秘事と云事ハ道を重んじて其傳ふべき器量の備らざる者ハ傳へと秘する事なりさるを秘事と称て是を法なるものなり又人ふ物問ひて我ものなる事をつくるをんなりと秘事と言道る人なり是等ハ風雅の道ふ志に輩ふ假ふなるまじき事なり又口傳とて〻る事ハ文字ふて恵ふて書寫さるべ〻詞と以て言ひ〻べ〻通じがなき事を口傳とて〻ふなり近世ハ文字ふて恵ふて書寫さる事ばかりを口傳や書止め置なる花書を多く見及びなり〻慷慨しき事ふ爰ふ書添なる口傳とて〻る事ハ實ふ花枝をとて〻〻〻〻〻〻〻〻徵のなるべきなり際なれば猶此御流を志たつる徒ハ諸國執勢の會下ふなり〻其口傳を明らむべし但正風雅整の大旨ハ後巻の置格をなり〻深意を悟るべ〻

樂善

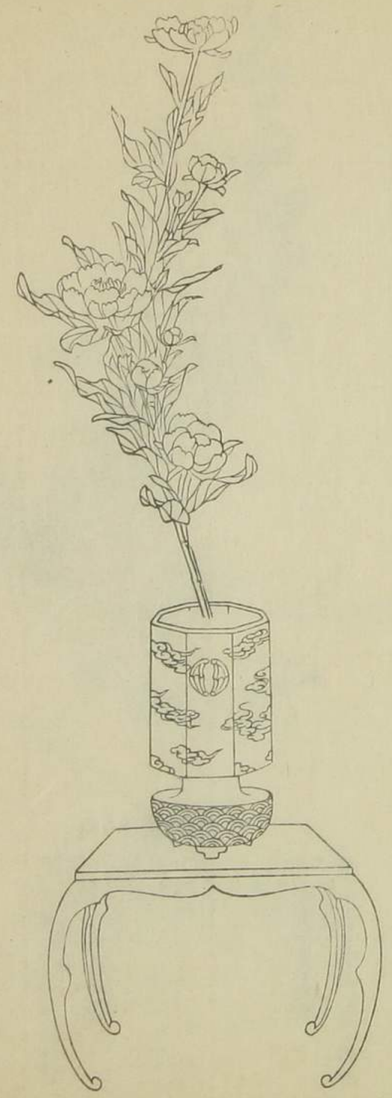
贍雅而極變化

尖奮而歸齊整

嘉永癸丑孟春應需

東坊城大納言聰長卿

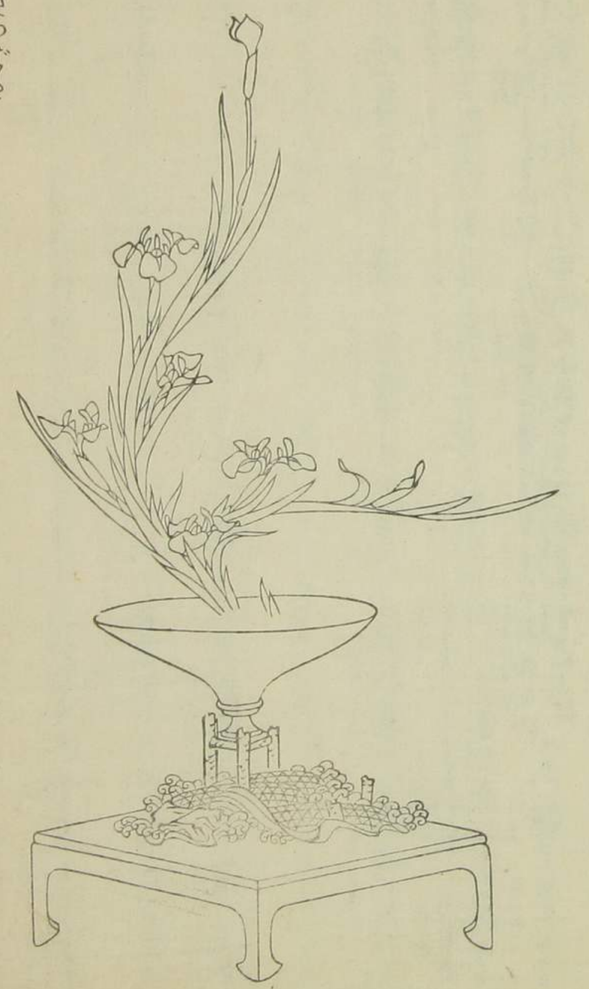
芍藥 五本



壽栄園 水谷有雅

山茶（つばき） 五花

蒼髯亭 岩田雙樹



蘂子花（かきつばた） 七卒

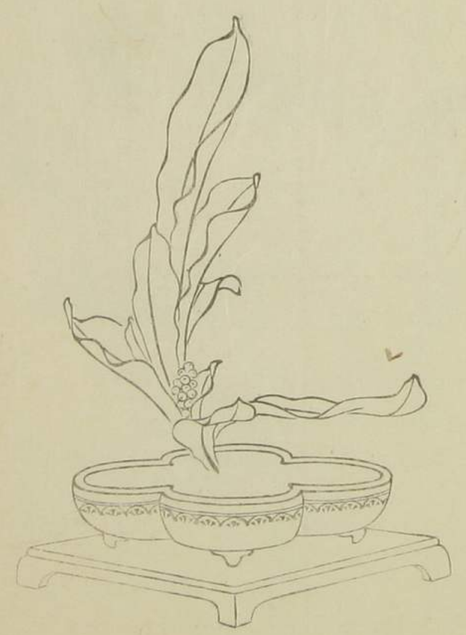
美松亭 佐竹勁節

右圖にある所の三体ハ即雅整体の真行草にして○附上ケ○中張○水際
靡といへる三体也。それ此真の体といへるハ地中より草木の發生してやゝ姿を
定めたるの体を備へたるもの也。故になびき下れる風情となさバ譬バ貴人の束帯
にして立る容の意也。又行の体といへるハ草木生立て漸形状とゝのひ盛なれせる
風格にして。およそ人の歩行意なり又草の体といへるハ木草盛りを過て枝條
屈曲をなし。或ハ靡下り撓しくして奥ゆかるさまなるゆゑ譬バ人の奔走する
意なり。されバ真ハ行を發し。行ハ草を生ず。但し真行草ともに過不及なく
正しく全体を整ふる事是又御當流の規格也。筆道においる真行草と活華の
事なりけるを同じさまに記したる挿花の書あり草木ハ天然活生の
伎にいて真行草ハいて差別ある
種書ハ人作筆頭の伎なれバ意体大に異なり必誤る事有べからず。こハ餘り巨大なる
たとへなれど。廣く 皇國の體にしていへバ。真ハ神代の如く行ハ神武天皇より

奈良の末迄の如く。草ハ延暦大同の以往慶長元和の以前の如し。然るに其
真中に又三体ありて神代に天地之初發と顯幽二分の有が如く行中に又三体
有ハ儒書の來りける以前と佛の渡りし前後の如し。草中に又三体有ハ平安遷
都の盛大なる兼久君臣の序を攪し建久亂後應仁の御衰頽有が如し。今よ
皇國のけふま萬の事も漸に古に立かへりつゝいやしくめでたくけなかゆく御代と
成ぬるハ。此三体のさまの草中草の体に至れバ。おのづから真の真たる元に
体に立帰りて盡ぬ榮えをたもつに所の奇しき奥旨ある傳に熟叶へる
ものなり。此三体を學ぶにまづ真の体をよくなす事で本つ柱とつきかため次に
行草の体を學ぶべし。行草の体を前に學で後に真の体を學バ本末を違ず
ゆゑに進事遅し。惣の花形心を一体の主とするも此意也

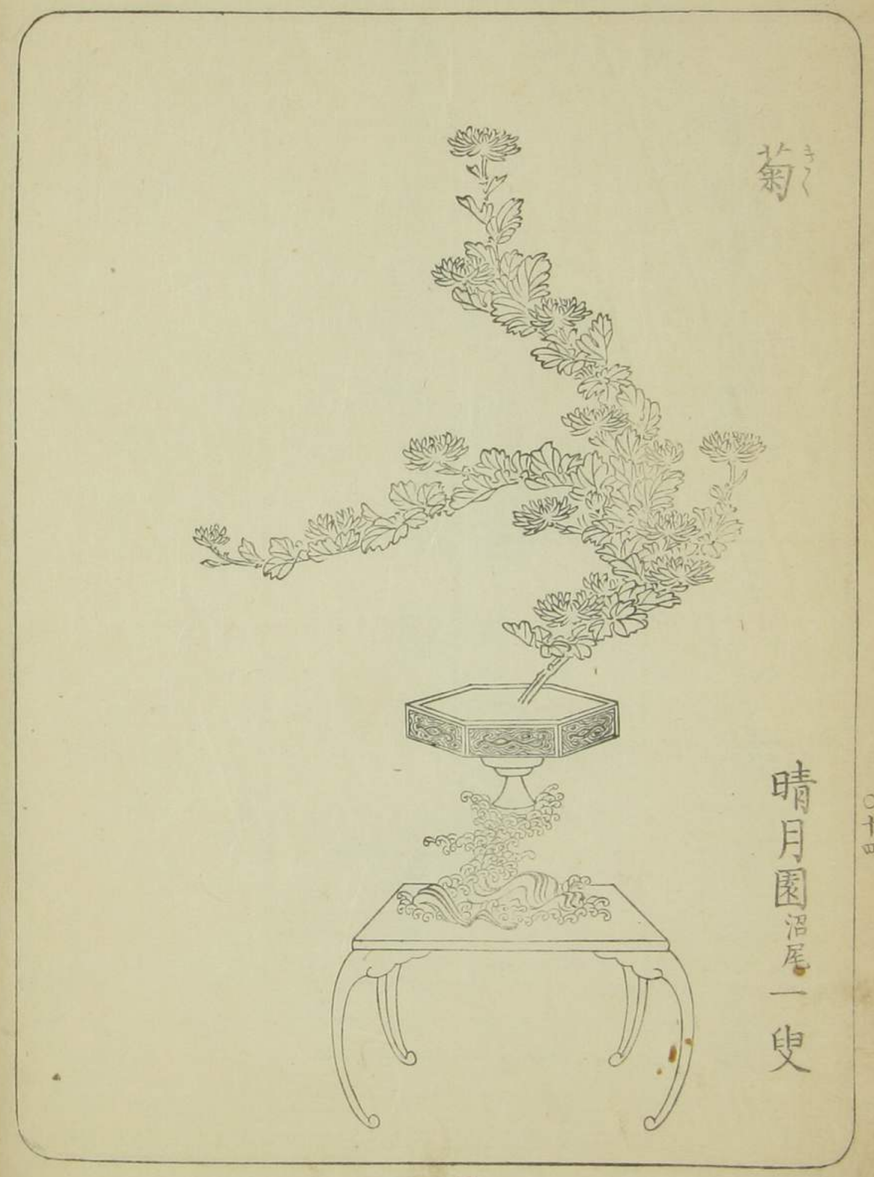
山茱萸（さんしゅゆ）

霜松園中村一成



萬年青（おもと） 九葉 實

蓬松亭森村翠雅



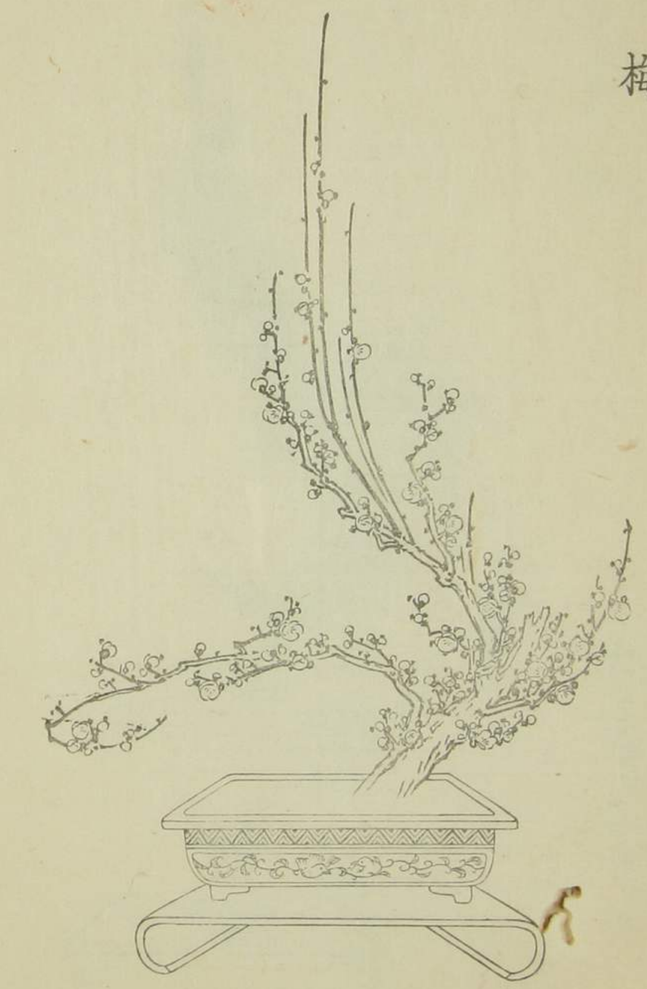
右の三体同じく雅整体の真行草なり○乗越○表曲○前後見
とゝる三体也。この乗越とゝるハ九体ハ通徹し。活用となり〳〵變化最
自在をなりの体なり。又心の枝の活用順逆の差別あり〳〵今古の格
を分つ等。ひぐ〳〵此体ハ限り〳〵口傳ハ行〳〵ざれば行〳〵がたき事ゝ
〳〵多し。又表曲もゝ体も。表裏の義ハ深々の窮理あり〳〵草木の
性容を委〳〵辨へざれハ其理を明らかハ知る事かたく。こゝ九枝傳ハ委敷著しゝ
表裏の事ハ書院飾の式より萬の事ハ見あり〳〵論ひ行る事なるを。
他門ハこれを誤るものゝ〳〵多く瓶花の書ハ見えあり。是等ハよく
よく習熟し〳〵深義をとゝきまえ置べき事なるとかし。表裏の事と辨ふ
手非勝手とゝふ義ハ自然の理を知るものなり　花体の本勝

水仙（すいせん）　五卒三苞

春月亭柴田濯柳

嘯月亭大塚雪渓

梅



錦章亭 水谷逸雅

右の三体ト同じく雅整体の真行草ハ○後附ケ○裏曲○後發見といふる三体也此後附ケといふ深き秘旨ある体ハ容易く書著しがたし又裏曲ハいふ則表曲の反對の格ハ後發見といふ前發見の反對の格なり是ハ此九体の名義ハ体格ハ九枝傳といふる委しく著しなると以て深の窮理ありといへども九枝傳ハ爰ハ省きつ

○九体の規格一体ごとハ如何ハ真行草の差別あるこまづ梅と桃とを分つハ梅の性ハ真の体なく桃の性ハ草の体なしさるを梅樹を以て真々の体をなす時ハ則真々の草ハいふる体とさし又桃樹を以て草々ハ体を挿とき草々の真といふる風格となる也

故ゆ九体各真行草の格有て、とべくい廿七体なり。是をつゞめれば九体ゆ帰し、又九体をつゞめれい真の一体ゆ帰るものなり。是等こゝ口傳ゆよりされぞなのきこめがたし

○九体の形状枝りの梅桃木の類と云葉りの仙人の類花りの藥の類ゆ應じまて山里水ゆよりて變化口傳多し。まて九体ゆ真行草の座といふ事あり。是い三体こりゆ心の乗ゆ定またる規則有て、これゆ隨ふて九枝ゆ位置ゆ差別ありまた真と行と草と全体の活様ゆ八境の定格ありて事等をいてるゆて、尤自然の妙理を備へたるものなり。何れも花枝を以て解語せざれい辨明しがたき所なり

○草木二種三種まゝへ挿事。御當流まゝい九種を限まゝるなり。

是を九体ゆよるがゆゑなり。此二種三種等取合をゝゝきい分格の傳といふる事ありて、他門ゆさだせる。根じめ有りて枝ゆいてる体とい大いゆ異なるものなり。こゝまゝ口傳ゆあり

○花枝の厚薄真の体を挿時い薄くゝい發生の姿なれどなりまて行の体を挿ゝきい厚く、草の体ゆ至まゝい最繁く挿事習なり。是等筆道の真行草と大ゆ異なる所なり。書ゆいて真行草い真い字格正しきをいい行ハ是を省き、草いまて省く、草木い發生の体を真ゝりゆゑ行草ゆ至りて枝葉を増の理也是まゝ他門あやまるもの多し。まて真行草い各一格の称なりを花体の三才と真行草と云る流派あり。是誤りの甚しきものなり。書ゆ一字ゆ真行草を兼たるゝいい好く書院飾ゆ真行草を兼たる飾抜いてるゝ理を考て知るべき事なり。是等い深く思慮をべきものなり

故ゆ菊ぞゝん、燕子花水仙の類會庭等ゆく數多く挿時い必行草の体ゆ限るゆ心得べし。但七種九種抜取合をゝまて別ゆ心得あるなり

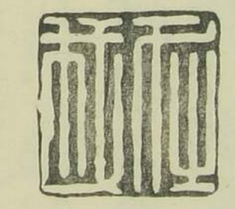
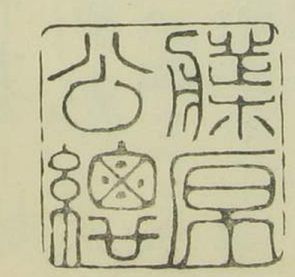
右九体の惣稱を雅整体といふる事は雅は正しきをいひ整はゝ〻のひなるをいふるゆゑ正風体の模範を研究し〻猶雅し〻整ひ齊なるの意なり贍雅而極變化失雋而帰齊整此義よく〻考へ

オホクタヽシケレドイヤヽニスガタヲカヘコトヒスグレテトヽヒタルニオモムク

活華手引種後編巻之一終

跋

近世御花者流麴塵華事一妖媚殆如絲刻綉豔則艷矣獨若無風致何此壽采園主人之所以著手引種續篇也晉簡文入華林園曰會心處不必在遠翳然林木便自有濠濮間想也余今讀此冊子一卉一木寄於餅蟠於盤天真爛漫饒有風致使人悠然有登邱臨壑對紅塵綠

之想而會心處近在几案間便覽
簡文意想尚屬遐遠矣豈所謂
進乎技者蓋此乎非耶癸丑仲春

左權少將公總樞